

CIEC

コンピュータ利用教育学会

NewsLetter

March 2015

No 60

お知らせ

- 1 2015PC カンファレンス

2015PC カンファレンス分科会論文発表募集中！！

日 時 2015年8月20日(木) 21日(金) 22日(土)
会 場 富山大学 五福キャンパス (富山市五福 3190 番地)

★ 2015PC カンファレンス分科会論文発表の受付を開始しました ★
下記のサイトからお申し込みください。

<http://www.ciec.or.jp/event/2015/report/>

応募締め切りは 2015年3月31日(火) 24:00 です。
今回も「論文賞」「学生論文賞」を設けています。
みなさま、奮ってご応募ください。

CONTENTS

- 1 CIEC 研究会報告
第103回研究会
第104回研究会
第105回研究会
- 2 CIEC 外国語教育研究部会第7回学習会報告
- 3 CIEC 春季研究会 2015 開催案内
- 4 CIEC 活動日誌

1 CIEC 研究会報告

CIEC 第103回研究会
2014年11月9日(日) 13:00 - 17:00
テーマ: スマートデバイスの教育活用への可能性

CIEC 第104回研究会
2014年12月13日(土) 10:00 - 18:00
テーマ: 地域連携と学びへの支援

CIEC 第105回研究会
2015年1月5日(月) 13:00 - 16:30
テーマ: 越境する学び
- 不確実・不安定な状況に対応できる学び -

2 CIEC 外国語教育研究部会第7回学習会報告

2015年1月11日(日) 13:30 - 17:00
テーマ: iBooks Author ワークショップ

3 CIEC 春季研究会 2015 開催案内

2015年3月28日(土) 10:00 - 15:10
会場: 大学生協杉並会館 地下会議室

4 CIEC 活動日誌

会員状況

◆ 個人会員 ◆

教員	604	大学職員	20
院生	59	学生	7
生協職員	53	企業	31
研究員	7	その他	45

◆ 団体会員 ◆

企業	33	生協	53
大学	1	高校	1
法人	1		

(2015年2月28日現在)

【CIEC 研究会報告】

CIEC 第 103 回研究会報告

テーマ スマートデバイスの教育活用への可能性
 日時 2014年11月9日(日) 13:00~17:00
 場所 東京学芸大学附属高等学校
 参加者 20名

CIEC 第 103 回研究会は小中高部会主催で、東京学芸大学附属高等学校で行われた。なお、司会は平田義隆氏(京都女子高等学校)である。

1 会場校紹介

今回の会場である東京学芸大学附属高等学校の森棟隆一教諭より学校紹介があった。情報教育については特に力を入れており、今年度全館無線 LAN により、情報の授業以外でもすべての教科で活用されている。

2 開催趣旨説明

開催趣旨について司会より説明された。

3 講演 1

1人1台の学習メディアについて

講師 中垣 眞紀氏 (ベネッセ総合教育研究所グローバル教育研究室 主任研究員)

ベネッセホールディングスの中垣氏よりベネッセとしての研究報告や取り組みが紹介された。最初に、ベネッセ総合教育研究所の紹介があり、次に ICT を活用した学びのあり方や小中学校での活用方法について、データとともに紹介された。なお、具体的なデータについてはベネッセ総合教育研究所の Web ページ (<http://berd.benesse.jp>) に掲載されているので、そちらを参照してほしい。



具体的な講演内容は、次の通りである。

(1) ICT の活用 普通教室で ICT が利用できるか?

データによると、普通教室で活用できる ICT 機器については、実物投影機 (88.1%小学校) をはじめ教材提示用の機器等が整いつつある。その中で小学校教員の約 80%、中学校教員の約 60%が ICT 機器を活用した授業に取り組んでいる。また、ICT 機器を活用したい(とても+まあ 95.6%)、なんらかの効果がある(とても+まあ 98%小学校)と回答している。つまり、多くの教員が授業での ICT の活用に向きである。

(2) ICT 活用の効果

これらを活用した授業での効果として「興味や意欲が高まる」という認識は 91.9%(小学校)と高い。しかし、「協動的な学び」や「主体的な学び」につながる効果があるという認識は約 20%にとどまっているのが現状である。

(3) 授業の変革意識~フューチャースクールを例として~

次に総務省の取り組みでおこなわれたフューチャースクール推進事業における実証校などでの授業実践を見学し、ICT を活用した授業の流れとして ①授業の目的を伝達し、②個人学習を行い、③タブレットを見せ合いながらグループワークをして、④電子黒板を使って全体へ発表をして、⑤教師が授業のまとめを行うという流れができていると感じた。

また、前述の調査によると身につけさせたい力と身につけている力には乖離があり、まずは「基礎的基本的な知識や技能を身につけるのが先決」という意見もある。また、理想は 1人1台であるが、小学校・中学校ではまだそのような環境にはならないので、どのように活用した授業を行うかも課題となっていると認識している。

これから激変の時代、地球規模での課題解決社会にたくましく生きていくことや、多様な文化背景を持つ多様な人々とのコミュニケーションが求められるだろう。そこには児童・生徒ひとりひとりが主体的に学び、自分の人生・社会を作っていく時代となる。それは今まで黒板とチョークで行っていた伝統的な学びの文化に ICT 機器が加えられ、新しい学びのスタイルとして今後多くの授業で展開されるだろう。同時に今までの与えられて覚える知識から、自分で考えて身につける知識への学びに変化するだろう。

しかし、サポート面で不安があるという教員もおり、今後は 21 世紀型能力の育成も視野に入れながら、子どもたちの主体的な学び、学びあいを促進する ICT の活用の研究に取り組んでいく。

4 講演 2

生徒がタブレットを必携しての 3 年間

講師 永野 直氏

(千葉県立袖ヶ浦高等学校 情報科 教諭)

千葉県立袖ヶ浦高等学校は、平成 23 年に情報コミュニケーション学科を新設、全国の公立高等学校で初めてタブレット端末 (iPad) を授業での導入を決め、全国的に注目されている学校である。学科の新設後今年で 4 年目になり、今年春に 1 期生が卒業した。学科開設から今日までの内容について報告された。



(1) 情報コミュニケーション科のスタート

情報コミュニケーション学科は情報科の専門学科ではあるが、従来ある職業学科ではなく、21 世紀型の教育をめざし、あらゆる場面において ICT 活用を目指した学科である。したがって、入学者全員にタブレット端末 (iPad) を自己負担で購入してもらい、あらゆる授業で活用している。全国的な傾向ではあるが、子供たちは情報機器をはじめとしたデバイスに囲まれる環境の中で生活しているが、先生方は、情報の「影」の部分を中心としてあまり活用しないという現実がある。これからの社会で求められる力として、情報活用能力があるが、残念ながら高等学校においてはまだまだ各教科での十分な活用ができていないことが課題である。

(2) ICT を授業で活用するために

ICT で学びを深めるために、マルチメディアの活用とコミュニケーション力が大切である。特にマルチメディアの活用は自分の考え等を表現することに意義がある。また、音声メディアの活用により、日々の記録について情報を蓄積し、デジタルノート等も活用することで情報共有力の育成を行っている。

しかし、自由な想像力や個人が持つイメージが失われなようにすることや、情報を鵜呑みにしないなどメディアリテラシーの育成について、これらを日々活用することによって生徒自らが学んでいる。あわせて著作権等についても日常から、十分留意させることが重要である。

次にコミュニケーション力の育成では、常に SNS や Twitter を有効活用している。例えば、職員の打ち合わせで生徒へ伝達事項があれば、SNS を活用して、全員にあっという間に伝えることができる。また、限られたホームルームの時間を連絡事項の伝達以外の目的に有効活用できるメリットもある。また、授業における意見の集約でも活用できる。

また、プレゼンテーションも 1 年生から取り組み、情報科以外の授業でもグループプレゼンテーションの実施や外部の方からの批評をしてもらっている。

(3) 新しい学び

情報コミュニケーション学科がスタートして 4 年目でわかったことは、今までの受動的授業スタイルから、生徒が主体的に学ぶことになってきたことが大きい。

先生から与えられた知識をただ覚えるのではなく、タブレット端末を用いて実際に調べたり動画などの記録を取ったりなど日常的に生徒同士で知識の共有をおこなっている。また主体的な学びの観点では、課題研究の授業で、グループで課題を設定し、それについて提案や改善を行うという研究活動を行っている。それをまとめる意味で毎年がスターセッション形式の発表会を行っている。

本校でのタブレット端末の使い方は、ドリル形式のような問題を詰め込むようなものではなく、生徒が自分たちで作ったりまとめたり発表したりする主体性を持った学びを生徒が自然に行っているのが特徴ではないかと思う。BYOD (Bring Your Own Device) が本校の特徴でもあるが、個人のデバイスなので 3 年間で行った取り組みの蓄積(デジタルポートフォリオ)が可能である。袖ヶ浦高校が目指しているのは、生徒自身がメディアに直接接触し、そして自ら「創り」、他者と関わりながら学ぶことである。タブレット端末の活用によって、生徒の意欲を引き出し、学力の幅を広げ、学びの質を高め深め、授業が生き生きとすることが、最も大きな効果だと思っている。

5 講演 3

授業で何を学びたいか

～近未来 ICT による授業方法を創造～

講師 森安 勇太 氏 (早稲田大学高等学院 2 年)

はじめに、現役生からみた早稲田高等学院の学校紹介(在籍数とコンピュータ教室)があり、続けてスマートフォンの所有率や活用方法などについての紹介があった。

(1) スマートフォンと情報の授業

現在スマートフォンの所有率は 90%で、ノートパソコンやタブレット端末を学校に持参して活用している生徒は 10%ほどである。スマートフォンの活用として、生徒側では、①板書の撮影 ②板書のまとめ作成(ノートの書き込みが間に合わない) ③LINE で情報共有として使っている。

授業で情報を活用した授業として、レポートなどの課題をワープロソフトでの作成や、プレゼンテーションソフトを活用して学校行事の旅行先でプレゼンテーションを行っている。英語の授業でもコンピュータを利用して語学学習にも利用している。また、学習塾では、ゲーム機で英単語の学習を経験したことがある。

(2) 授業と家庭学習

授業での取り組み方として、家庭で予習復習をきちんとおこなって授業を受けるか、試験前に駆け込みで暗記(一夜漬け)型の 2 つに分けられるが、後者の方法をしている人が多いと思う。理由は、予習復習は家庭での学習が前提となるが、本心は、家に帰ってきてまで勉強をやるという気は進まない。授業終了後の部活動や通学時間などを考えれば、学校から帰宅したときには、身体は疲れ切っている。また、家庭でやることは勉強以外にもたくさんある。勉強は学校で、それ以外の取り組みは家庭で行うなどのメリハリをつける必要がある。

(3) 勉強するという意欲の引き出し

「授業がおもしろい」先生は、教科書だけを行うのではなく、日常の出来事を授業の内容に絡めながら、展開すると生徒はその授業に関心を沸く。しかし予習復習についても、指示されたら取り組むがそうでなければおこなわないという高校生が多いと思う。正直、疲れて帰ってきて、そこからまた教科書を開くのは難しい。それならば、自宅までの移動時間を利用して予習復習できるようなものがあれば、取り組むかもしれない。また、できないことをできるようにする意欲を先生方が引き出してほしい。そうすると、なぜ学校で勉強するのかという意義を理解できると思う。

6 共有と意見交換

意見交換では次のような意見が講師や参加者から出されたので、紹介する。

- ・学校での SNS の効果的な使い方と基礎的なリテラシーについて
- ・ICT 機器導入の方法について(効果的な使い方や事例など)
- ・反転授業について
- ・高校生が抱える現実の問題
- ・子どもに興味を教えるツールとしての ICT や学びあい
- ・紙媒体での大切さとコンテンツの不足
- ・ICT を利用する際に気をつけなければならないこと。など

参加者は少なかったが、有意義な時間を共有することができたことを付け加えます。

※紙面の関係から各講演の質疑応答は割愛しました。

文責：石谷 正 (北海道小樽桜陽高等学校)

CIEC 第 104 回研究会報告

テーマ：地域連携と学びへの支援

日時：2014年12月13日(土) 13:30 - 15:30

会場：椋山女学園大学 星ヶ丘キャンパス

参加者：41名

■ 開催趣旨

これまで、教育機関は地域の様々な組織と連携し、それぞれの個性を大切にしながら、多様な学びを支援する取り組みを行ってきた。しかしながら、近年の情報社会の急激な進展や経済・社会環境の大きな変化は、地域のつながりを希薄化させる方向に働いているのかもしれない。少子化・高齢化・核家族化やコミュニケーション手段の変化などの要因から、家庭や地域における教育力やつながりながら協力する力が次第に低下していると言われていた中で、地域のネットワークは、ますます重要な役割を果たすようになっており、それぞれの地域の課題に対応した市民、NPO、ボランティア団体等が、従来とは異なる協力関係で新たなネットワークを構築しつつある。この研究会では、地域連携に期待されている役割や新しい地域の様々な取り組みについての事例を紹介していただき、そして、学校・家庭・地域・行政が様々な課題に対して協働して取り組むことのできる社会のネットワークを構築するために必要なことは何か、地域連携における教育機関のあり方などについて考える機会とするものである。



※ CIEC 第 104 回研究会は、同会場で行われた日本教育工学会の研究会（テーマ：地域連携と教育実践 / 一般）との連携開催で行った。CIEC 研究会の開催会場を、日本教育工学会研究会の各報告会場の一つと同じ会場とし、時間帯を調整することで、互いの研究会の参加者が、無理なく2つの研究会に参加可能なプログラムとした。

■ 地域連携による学びへの支援

ー 協働する地域コミュニティ活動の推進 ー

武長脩行氏（椋山女学園大学 教授）より、地域コミュニティにおける非営利活動の担い手である市民、NPO、ボランティア団体等、行政、企業などの役割や、学校・家庭・地域・行政が様々な課題に対して協働して取り組むことのできる社会のネットワークを構築するための方法論などについて報告していただいた。武長脩行氏の専門分野は、経済学、特に公共経済学であり、政府の活動や税の使われ方を経済学の視点から、税の理論、公的年金制度、医療保障制度、教育の経済的価値、環境の経済学などを多様に研究され、また、市民、NPO、ボランティア団体等に関する研究や調査の他、それらの実践活動も活発にされている。

まず、最初に、氏は、非営利活動が活発になってきた背景として、世界的に1970年代の経済不況があるとされ、それまで、福祉国家と呼ばれている国は、経済活動による税金が期待でき、政府が国民のために十分な支援を行うことが可能であったが、1970年代の世界不況から、政府の

規模を縮小させ、財政支出を削減する方向性が現れ、1980年代には、いわゆる「大きな政府」から「小さな政府」へと変化がみられた。このころから、世界的に、非営利活動が活発化してきたとのこと。



この活動は、Lester M. Salamonの「地球規模の連帯革命（global associational revolution）」として、欧米諸国で従来から行われている旧タイプの慈善活動ではなく、知的中産階級の人々が主体となり、様々なテーマについて連携しながら行う活動である。先進国は、豊かな社会であるにもかかわらず、貧困や外国人との共生など多くの問題をかかえており、すべてを政府に任せることができない状況となっている。さらに、その後、非営利組織による活動がさらに活発化してきた背景として、インターネットの普及やICTによるコミュニケーションの変化も大きな要素であると解説された。

そして、今後の社会は、経済的な資本ではなく人間関係による資本 Social Capital（社会関係資本）、Social Contribution（社会貢献）、Social Media（ソーシャル・メディア）の3つのSの社会である。特に、人間関係がしっかりしている地域ほど、助け合いがあり、犯罪率は少ない。これは、いわゆる社会インフラと言われる道路や橋などではなく、人間関係が資本であり、自治体や町内会などの活動が活発であることを意味している。

行政（国や地方自治体）、民間企業、市民・非営利団体（NPO）などの関係で考えると、たとえば、それぞれ、行政（国や地方自治体）と企業間には、発注や規制と納税や寄付、行政（国や地方自治体）と市民・NPOの間には、サービスや助成と納税や寄付、企業と市民・NPOの間には、寄付やPhilanthropy（社会貢献活動）や寄付と評価の関係があるが、日本でも、いわゆる市民・NPOなどの第3セクターが1980年代以降増加し、公務員ではなく民間であっても公益的なことを行う組織が増えていく必要がある。

そして、NPOとしては、多様な非営利組織が存在する。従来から社会福祉法人、財団法人などの他に、学校法人や宗教法人も広義の非営利組織の法人で、営利を目的とせず、公益を目的とする団体に当たるので、広義のNPOである。これに対し、狭義のNPOは、市民活動団体であるが、この中で、最狭義のNPOは、特定非営利活動促進法によって認証された組織である。これらの組織以外に、営利を目的とせず、会員や組合のための共益を目的とする団体として、協同組合、労働組合、同窓会があると説明された。

さらに、東日本大震災の事例として、当時、行政サービスを行う場所が津波によって破壊された事を挙げられ、自助・共助・公助という3つの視点で考えると、自助は、住民が自ら生き延びることだが、なかなか、簡単ではなかった。共助は、地域の人々が助け合いであるが、壊滅状態であった。公助で援助を行わなければならないが、行政も機能しない状態であった。そして、全国から多くのボランティアが集まったが、行政機関も仮設となってしまったために、適切な情報の伝達や役割分担の指示などもできず、人・モノ・お金・情報がつながらず、協働が全く成立しない状況となってしまったとのこと。東日本大震災の直後の

事例から、自助・共助・公助がそれぞれ適切に役割を果たさなければ、協働はできないことが判明した。これは日常的にも同様であり、自助・共助・公助の3つが適切に機能することが前提であり、その中でも、地域コミュニティや地縁組織である共助の役割や行政の役割は非常に大きいということになるとまとめられた。



次に地域の範囲は、様々にとらえることができるが、コミュニティという言い方の方がわかりやすい。人の顔が分かり、たとえば、地域の祭りや挨拶ができる関係の範囲を地域コミュニティのベースとするのがわかりやすいとされた。また、大都市では、地縁などの付き合いの煩わしさから逃れられる自由を求める傾向があったが、高齢化により、孤独死や買い物難民などの問題がクローズアップされ始め、地域コミュニティレベルでの解決策を求められることになっている。地域コミュニティがなく、人間関係が希薄で人間関係資本が少ないことが大都市の特徴である中で、その大都市に地域的な協働を行う力（地域力）をどのように構築するかが問題となっているとのこと。

また、NPOには、地域密着型とテーマ型がある。たとえば、地域密着型のNPOでは、ある地域の不登校の問題や、外国人労働者の多い地域の問題などに地域コミュニティをベースに取り組んでおり、テーマ型のNPOでは、環境問題などで愛知県や東海地方など、さらに広い地域で取り組んでいることが多い。NPOは、基本的には、テーマ型をベースに地域密着型とするか、広域的な組織とするかを考えるのが適切ではないかと解説された。

協働という言葉は、比較的新しい言葉であるが、「パートナーシップ」という言い方もある。「協働」は、コラボレーションを意味し、活動に焦点を当て協働推進条例などの事例で使われ、一方、パートナーシップは、主体間の関係を示し、合併した市町村の場合にはパートナーシップ条例などが制定される。協働は、前述のように経済が不景気になり、税収が減り、課題として解決すべきテーマが多様に存在するため、行政ですべて対応できないことから、公共という概念を幅広くとらえるもので、協働に取り組む組織は、それぞれ補完関係にあり、1+1が、3にも5にもなることを狙っているものである。そして、協働のテーマは多様であり、基本的に自分の住んでいる地域の個性を知り、好きにならなければ、そのために何かやろうとは考えられない性質のものであり、時代とともに課題やテーマは、変わっていくものである。したがって、自分の地域を好きになること、自分の地域の良さを発見すること、自分の地域の課題を見つけること、時代の変化に対応した地域にすること、自ら地域活動に参加すること、組織作りを進め地域活動を活性化すること、そのための地域活動のヴィジョンを作ることが大切であるとされた。

次に大学などの教育機関との協働としては、たとえば、大学の講義室やコンピュータ室、体育館などの運動施設の活用や人材（教員、職員、学生）の活用などがある。NPOに対して行政側が市の会議室やホールなどの公共施設を貸し出す場合、受益者負担の意味で使用料を負担させられ

る。最近では、大学も施設を貸す場合に使用料を課す例が増えているが、文部科学省も地域貢献を行う方向性を打ち出しているので、NPOが地域のための活動として利用する場合には、一定の配慮



をすることが望ましい面がある。また、NPOの活動としては、土日などが多く、大学職員の残業代が出ないなどの理由で参加できないことの問題もある。したがって、教員が中心になって、行政と大学が協定を結び、関連する委員会委員になって手伝う方法も考えられる。このような委員会には、市民からの参加も多く、委員になることで、人的なコミュニケーションの幅が広がる。また、行政側やNPOは、学生ボランティアの参加を望んでいる場合が多く、ボランティアとしてこのような活動に参加することで、学生にとって、社会性や自主性の面で有益であり、よりよい生活や社会を創り上げていく経験を積むこともできるので両者にとってよい関係となる。さらに、教員の専門的知識の活用は、特に重要である。たとえば、「タイラー・コーエン (Tyler Cowen)」は、著書「大格差 (Average is Over)」の中で、今後、ICTに関する知識がある場合とない場合において、大きな格差が生じ、貧富の差が拡大することを示唆しており、この学会の関係している教員の専門的知識は、非常に重要である。さらに、公共のために良いということの意味する Pro Bono Publico を語源とする「プロボノ」という言葉があり、これは、様々な分野の専門家が、その知識や技術、経験を活かして行うボランティア活動もできるので、教員は、専門的知識を活用することで社会貢献を行うとよいと提案された。

ボランティア活動を市民活動というように定義してみると、市民が自ら思い立ち（自主的）、自らの意思（自発的）で行う活動であり、非営利の、みんなのためになる活動であり、誰もが参加できる活動である。そして、活動を続けていこうとする団体、団体として社会的な責任を持ち、活動していこうとする団体という要素が加わると、市民活動団体ということになる。

また、ボランティア活動の経済的評価として、たとえば、人口10万人の市の住民の3万人が、平均週2時間、週1回、様々なボランティア活動を行うとして、仮に最低賃金を800円として算出すると、3万人×800円×2時間×52週=24億9,600万円となる。そして、新入社員の初任給を20万円とすると、24億9,600万円÷(20万円×12か月)=1,040人となる。これは、公共奉仕の非営利サービス団体にとっては、そのサービスを労働力に換算すると1,040人のフルタイム従業員に相当することになるので、ボランティア活動は、減税になり、ボランティア活動が活発な地域は、住みやすいし、公務員の数を減らせることになり、財政的にも改善される要素となることがわかる。

ただし、市民・NPOと行政の協働の原則として、行政との関係では、協働が成立しない事例があるが、これは、その組織の位置づけとして、予算を持ち組織的な行動のできる行政が立場的に上になり、市民団体やボランティア団体が常に使われる側になってしまうことが原因でうまく機能しない事例も多い。このような問題を解決するためには、何のためにやるか、目的や目標を共有し、相互理解し、

透明性を確保し、協働で行った活動の評価の実施を行うことが必要である。

最後に、協働する地域コミュニティ活動を推進するための課題として、まちづくりの課題は常に変化するので、その時期に合った課題を考えること、地域の固有性に配慮すること、人、モノ、お金、情報などの経営的資源の問題への対応、地域コミュニティ活動を継続させるためのリーダーの育成を行うこと、若者の参加を促進させることが必要であるとまとめられた。

■モノ作りを通して地域と人がつながり、視野と志を広げる学び

ー ワークショップ ギャザリングにおける実践 ー

宮田義郎氏（中京大学 教授）より、個人の学びと協働体の学び、グローバルな学びの関わり合いの構成について、学習環境デザイン、異文化コラボレーションなどの視点からの話題を提供していただいた。氏の専門は教育工学・認知科学。個人の学びと協働体の学び、グローバルな学びがどのように関わり合い構成されていくのかに関心を持ち、学習環境デザイン、異文化コラボレーション、創造的ワークショップ、リフレクションデザインの視点から研究を行っているとのこと。

最初に「地域」や「地域連携」を考える前に、「地域連携と聞いたときに、どれくらいの範囲を思い浮かべるか」の問いと、「世界で起こっている飢餓や紛争の問題に、自分も責任を感じるか、どのくらい責任を感じるか」の問いが投げかけられた。そして、氏が取り組んできたプロジェクトの紹介では、最初は地元の町から始まり、町から県、県外、そして世界との連携へ次第に拡張した様子が報告された。連携により次の可能性と、新たな人々との連携が生まれる。地域が連携することで、一つの地域の中では出来ないことが出来るようになるとのことであった。



氏の地域連携のきっかけは、大学近くの生涯学習センターの依頼で地域カレッジを担当し、学生とともに企画者となって、定年退職者の参加者とワークショップを行った。活動を終えた時に参加者から「来年は子どもたちと一緒にやりましょう」との提案があり、翌年は参加者が学生と一緒に企画者になり、子どもたちが参加して、三世代で街の未来を考え、ジオラマの制作を行った。次にブラジル人のコミュニティを支援するNPOとも連携し、地域の外国人の方が参加し、地球儀の制作を行った。参加者は、次第に企画者の視点でワークショップを考えるようになり連携が拡張していったとのことであった。

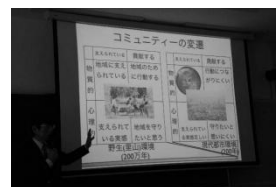
また、東京で毎年開催されるNPO法人CANVAS主催の「ワークショップ・コレクション（以下、WC）」は、100のワークショップと10万人の子どもが参加する大きなイベントであるが、氏は学生とともにワークショップの企画者として毎年参加している。全国から学校関係者、ワークショップの専門家、企業の人々が集まり、デジタルからアナログまで多様なワークショップが開催されるので、互いに刺

激を受け、学び、情報交換を行う場となっている。また、COP10の名古屋開催時、世界中の人が参加し、生き物をテーマに実践的なワークショップが行われ、次第に発展して「ワールド・ミュージアム・プロジェクト（以下 WMP）」となった。30 国以上の学校やミュージアムの人たちの連携により、様々な実践を継続している。連携とは「拡張していく」こと、そして、地域「内」連携から、地域「間」連携、という形が生まれてきたことがポイントだと、氏は指摘した。

このような実践を通して、氏は、次第に地域のコミュニティの本質を考えるようになったとのこと。特に WMP のパートナーであるタイ北部チェンマイの近くの農村（バンサンカ）の学校を訪問した時、子どもは、自分たちの食べ物について、その生産場所や製造方法を体験から知っていることが衝撃的であったとのこと。村の森のチークの大木が伐採され、保水力低下の際にも、大人と子どもと一緒にダムをつくり、川をよみがえらせた経験もあり、川の水で水力発電がおこなわれていることも知っている。子どもは、水、食べ物、エネルギー、全てを自分達のコミュニティの中で作られていることを知識として持ち、人間関係に支えられたものづくりを子どもたちは経験している。食事を一緒にすることは、非常に意味のある行為であり、単に美味しいものをおなかいっぱい食べるのではなく、つくりあげたコミュニティと一緒に味わい、自分たちがコミュニティに支えられていることを知ることで、コミュニティに貢献する。これが当たり前で自然なことであると、子どもたちと話していて強く感じたとのこと。このような、「支えられること」「貢献すること」の循環が本来のコミュニティではないかと考えるようになったと解説された。

さらに、前述の「飢餓の責任」の問いにも関わる話題では、日本で食べられている食糧の70%（5千万トン、1日1人当たり1.25kg）以上が、海外から輸入され、食べきれずに年間1,500万トン廃棄されている。

一方、世界では食料の不足による死亡者が1,500万人いる。日本で廃棄される食糧は5千万人の食糧であり、このような状況であっても食料がどこから輸入されているか、誰がどこで作っているか、意識することは少ない。現代の戦争の要因は、飢餓と抑圧だと言われており、たとえば、シリアの内戦は、干ばつによる飢饉と水資源の配分への不満から起こった。抑圧や対立の多くは、資源の利権争いから起きることがよく知られている。日本はエネルギーやモノをつくる資源を海外に依存しており、日本の生活レベルを世界中の人に適用すると地球3個分の資源が必要だと言われる。日本人が飢餓と紛争に加担していると言えるのではないだろうかとされた。しかしながら、意識的に加担しているのではなく、構造的な問題であり、簡単に解決できないので、我々に何が出来るかと考えるようになったとのことであった。



タイのコミュニティのように里山の環境に暮らしている時には、物質的にその地域に支えられ、その実感を持つことができる。したがって、その地域を守りたいと思い、

守るための行動が自然にできる循環がある里山的な環境であり、それに対し、日本の都市環境のコミュニティでは、物質的に世界中に支えられているにも関わらず実感を持ちにくく、守りたいと思うことも難しく、行動につながりにくいという違いがある。このような物質的なつながりと心のつながりのギャップをどう埋めていけるのか。

また、里山の環境に暮らしている子どもの学びからは、水や食べ物、エネルギーの他、道具を作り出す過程が見えている。子どもは大人が作業を見ることで、実践的に学び、修得する。このような挑戦心と好奇心の循環が学びを促進する。Mihaly Csikszentmihalyi のフローのグラフに適用すると横軸が「理解」、縦軸が「アクション」となり、理解が進むほど出来るようになることを示し、「学びのフロー」が起りやすい状況を示している。また、作る人と使う人が直接コミュニケーションできるため、モノづくりを通しての人間関係が構築されやすい。この連鎖が、コミュニティが人を支え、そのコミュニティに人が貢献する循環がおこりやすいのではないかと。

一方、電子レンジでのパッケージ食品の加熱や、エアコンでの冷暖房では、食品、エネルギー、道具などを作り出す過程を全く見る事ができない。故障しても容易に修理できない複雑な道具を使用しており、自分で作ってみようという挑戦心や好奇心が働きにくい社会となっている。また、作る人と使う人の関係が構築できないために少数の生産者により大量生産されたものを多くの人々が使用していることも問題である。

ここで、氏は「アージ理論」を紹介された。「アージ理論」は、野生環境で暮らしていた祖先が、野生の中で合理的に行動できるような感情システムを発達させたとの戸田正直氏による理論で、協力や援助といった他人との係わりに関する社会的アージがあり、これが適切に働くことで、我々が支えられている環境を守る行動や、人間関係を維持するための行動が起きる。しかし、現代の道具や環境は、社会的アージが働きにくく、抑制されてしまうようなデザインになっているのではないかと解説された。

社会的アージを働かせるためには、まず、何か作る過程が見えることが重要で、それによって挑戦心と好奇心の循環が起こる。人間関係が構築され、コミュニティを支えることや、冒険することの循環が作りだされる。社会的アージは退化していないので、現代都市環境においても、地球規模においても、挑戦心と好奇心を生み出し、循環を起こすことが出来るのではないかと。そして、もう一つ、「ローカルで作った連携(Create)をつなげる(Connect) ことにより新しい可能性が開ける (Open)」モデル、Create/Connect/Open モデルを紹介され、地域でつくるモノ、人間関係、意味などを複数の地域でつなげることによって、互いにとって新しい可能性を拡げる連携のデザイン原理、学びのモデルを考えながら様々な連携をとっているとのことであった。

氏は、自らのワークショップの実践を繰り返すうちに、人々の支援によって、ワークショップが成立し、つながりの連鎖が拡張し、地域で出来るワークショップの内容も規模も参加者も広がっていくことを実感する中で得た経験から現代の都市環境であっても、地域での取り組みを世界に広げるデザインの可能性が見えてきたと報告され、地球

規模の可能性を示した実践として、氏が展開しているモノづくりを基盤としたグローバル・コミュニティづくりのWMP と、そこでの子どもたちの学び「World Friends Project」を紹介された。「World Friends Project」では、子どもたちが、好きな内容の絵を描き、その絵をScratchというソフトウェアの画面上で動き回り、誰かと出会うと自己紹介をするというもので、作品全体を見ると、自分が世界の子どもたちと話をしている経験が出来るものである。このプロジェクトに様々な国の子どもたちが何百人も参加した。このきっかけから、多くのパートナーがWMPに興味を持ち、「LunchBoxProject」というプロジェクトにつながった。このプロジェクトは、それぞれの国の子どもたちが普段食べているものを紹介する中で、家族や日常の暮らしや、その子を通してのその子の周りの文化が少しずつ見えてくるプロジェクトとなった。さらに「World Friends On Tour」プロジェクトでは、「LunchBoxProject」に参加した子どもたちが仲良くなり、日本とボストンの間で毎週 Skype 通話をしている中で実現したもので、自分の町を紹介するという作品が多くの国から集まった。

ある日本の男の子は、最初は、Scratchを使っただけのプログラミングが面白く、作品を一生懸命作っていたが、出来るようになって人に見せたくなり、さらにコメントをもらおうと励みになった。ボストンの子どもたちからコメントが来るとその子に興味を持ち、今度はその子がどんなものを作っているのか興味を湧く、このようにモノづくりを通して人に興味を広がり、次第に一緒に作るようになっていった。特に海外の子どもたちと何か共有できるような意味を作ろうとする中で、前述のプロジェクトが生まれた。

このように、仲間を増やし、様々な国の子どもを巻き込みながら、プロジェクトを進めていくコミュニティづくりは、モノづくりから始まり、人から人、人間関係づくり、意味づくり、コミュニティづくりへと次第に広がる。このような学びが、世界中の子どもたちの間で起こっているのが非常に興味深いことである。氏は、このような地球規模の実践として、2015年3月にも「音楽作りで世界とつながる！」とのワークショップ&コンサートを行う予定であり、また、今後も継続して様々な展開を行っていくことを示して報告を終えられた。



文責 CIEC：鳥居隆司 / CIEC・日本教育工学会：亀井美穂子

CIEC 第105回研究会報告

テーマ：越境する学び -不確実・不安定な状況に対応できる学び-

日時：2015年1月5日(月) 13:00-16:30

会場：大阪工業大学 うめきたナレッジセンター（グランフロント大阪 ナレッジキャピタルタワーC9階）

共催：教育システム情報学会関西支部，日本情報科教育学会 近畿・北陸支部，NPO 学習開発研究所

参加者：30名（高校生，大学生，大学院生，小中高教員，大学教員，教育系NPO法人関係者等）

司会：辰島裕美（金沢星稜大学女子短期大学部）

進行：大木誠一（元神戸国際大学附属高等学校）

運営：CIEC 小中高部会



■開催趣旨

CIEC 小中高部会は，今，ICTをどのように利用するかだけでなく，教室の「学び」そのものに焦点を当てようとしている。そこで，本研究会では，高大接続で求められる学びとは何かを探るため，大学の情報教育と中学・高校の事例を取り上げる。昨年開催した2014PCCセミナー1では，現役の高校生が，パネル発表やこれからの情報教育についての提言を行った。高校生の発表や意見に直接接することは，多様な視点から「学び」について議論することの大切さを再認識させるものであった。

本研究会は，小学校・中学校・高等学校・専門学校・大学等すべての教育機関における新しい「学び」を，できるだけ多様な視点から議論できる場となることを目指して開催する。学校で当然のことと思われ，決まりきった日常活動になっている「学び」に，変化をもたらすための機会として「越境する学び」をテーマとし，ワークショップ形式で開催する。ここでは，中学生・高校生・大学生を含み，教員，教育関係者，教育に関心のある社会人までの幅広い参加者が，立場や違いを越えて対等に議論することを想定している。ICTを活用すれば「学び」が自動的に促進され，タブレットなどを導入するだけで子ども達の「学ぶ意欲」は向上すると報道される傾向もある。しかし，導入だけでは教育効果が上がらず，ICT活用教育が否定されることさえ起こっている。ICTの活用と何が組み合わせられれば，「学び」がうまく展開されるのだろうか。従来，日常生活でスマートフォンをよく使う生徒・学生とともに，教え手・伝え手がICTを活用した「学び」について検討する機会はほとんど無かった。ICTは多様化する学びをサポートするツールだ。しかしながら，考えることを自分で学び，あるいは，学び直すために正しく問題を提起するためには，自分の言葉で語るができる場が必要である。

「学び」について，人としてのすべての違いを越えてお互いが対等の立場で協働し議論したい。

■プログラム

13:00-13:05 開会の挨拶

13:05-13:13 開催趣旨説明

13:13-14:15 グループワーク 1

「ICTを活用した学びで伸ばすことができる力は何か？」

グループごとに討論

(約60分)

14:35-15:35 グループワーク 2

ワールドカフェ [他グループの意見を確認] (10分)

「これからの学びに必要なものは何か」グループ討論してまとめる

(50分)

15:35-16:20 共有と意見交換

グループごとにまとめたものを発表し，全体で意見交換

16:20-16:30 閉会の挨拶（アンケート記入）



■開会の挨拶

中西通雄氏（大阪工業大学情報科学部コンピュータ科学科）より，本研究会の会場である大阪工業大学うめきたナレッジセンターに関する紹介があった。普段は大阪工業大学の知的財産専門職大学院（社会人向け大学院）で利用しているとのこと。



■開催趣旨・背景・課題説明

進行の大木誠一氏（元神戸国際大学附属高等学校）より，資料に基づき本研究会開催の背景と，テーマ，流れ，課題等が説明された。背景では，高大接続，主体的に学び考える力の育成，大学入試改革，高校の授業の質保証，アクティブラーニングなどについて触れられた。

ワークショップのテーマは，「主体的に学び考える力を身に付けることを目的とした『学びの環境』をデザインする」である。

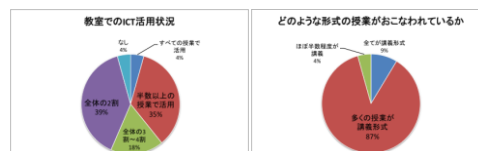


■グループワーク

まず，ワークシートに基づき現状の問題点把握を行った。本研究会参加者の状況は下図の通りである。その後，研究会資料に基づき，学び手主体，評価主体，知識主体，コミュニティ主体という4つの視点について説明が行われた。

各グループで「特色のある授業の紹介」や「教室の学びにICTは必然か」という観点で意見の交換，共有後，現状と問題点について話し合い，その後「主体的に学び考える環境をつくるにはどうしたらいいのか，どんな環境が主体的に学び考える環境なのか」について話し合った。

話し合った内容を模造紙にまとめた後，ワールドカフェ形式で6つのグループ間の情報共有や情報交換を行った。



■グループ発表

グループごとに模造紙を提示しながら話し合った内容を発表した。中には紙芝居形式のものもあった。グループ

ワークやワールドカフェで議論した時に模造紙に書き込んだメモ（一部）と、発表の概要は以下の通りである。



1) 「主体的に」という部分を、Reflectionを通して実現して行くことができる。「現代社会」の授業で好きなものや興味のある事柄を調べて発表する体験から、様々な気づきや学びを得た高校生の体験から、最初は強制であっても教師からテーマや切っ掛けを与えることが大切であり、学習活動の後で、良いReflectionを促すことが出来る教師や外部人材の存在が必要。



2) 主体的な学びの環境の条件は、教師と生徒との信頼関係があること。目標と評価の仕方を公開することが前提。また、生徒同士で互いに学び合える、高め合える関係性を作ることが重要。個人主義に陥っている生徒達の実態を理解し、生徒達同士が互いに理解し合うことが大事であるという明確なねらいを持って指導しなければその関係は築けない。互いを理解し合う、多様な学び方を仲間達から学びシェアする。生徒達を信頼することで、管理ではなく色々なスペースを与えることが出来るようになる。英語の試験へ向けての取り組みで、英単語を理解するためのムービーを作らせてクラスのLINEで共有させた所、学力向上に結びついたという実践事例から、互いの学び合いが推進する環境を教師が提示することが大切。



3) 「越境する学び」が研究会のテーマであるので、越境とは何か、その問題点やメリットを掘り下げた。越境する中で価値観の多様性を理解すべき。ロケーションを広げることも重要。一番の問題は評価システムではないか。高校で越境した学びを体験しても、大学入試では評価されない現状が問題では高校教員のマインドセットを変えることは難しい。主体的な学びを推進するには評価システムを変えることが必要。



4) 「気づけば学んでいた場」を最終目標として考えた。この場に必要な3つの要素は、①社会とのつながりを知る（学生自身が気づけることが望ましい）②とっつきやすい（スマホ、タブレットを使うなどICTを活用）③自分の興味に関係することである。最終的には「次につながる学び」になることが最も重要。学生自身が次の一歩へ踏み出すことへの動機付けになる。

5) 主体的に考える力を身につけるために、高校において講義型学習（自分で考えながらノートを取って主体的に関わることができる）、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、協働学習など様々な学習環境をデザインし、それらの学びを生徒が経験することで、自分が主体的に学びやすい学習スタイルを選択できるようにして大学や社会へ出て行くことが必要。自分の意志があるということが主体的ということであると考える。

6) 学習者が主体的に学んで行くためには、学習内容が身近であることや学ぶことでメリット（楽しいと感じることでもよい）が生じる必要がある。ICTを活用することで、興味関心を持たせる切っ掛けを与えやすい。また、学校外とも手軽に繋がることできる。ただ、ICT活用ばかりだと飽きも生じるため、ICTを活用しない活動とのメリハリ付けた展開が重要。教師の役割は、互いを否定しない場の雰囲気を作り、協働しやすい教室環境を用意することである。



■ アンケート結果から

本研究会終了後にアンケートを実施した所、ほぼ全員から回答が得られた。

- ・いろいろな立場から多様な意見を聞くことが出来て勉強になった。「学び」についてたくさんの考える材料をもらったのでこれからじっくり考えて行きたい。
- ・いつもと違う分野の人と話が出来て良かった。
- ・学びの最大化のために学習環境の整備と言う観点での様々なアイデアを聞くことができてとても参考になった。など、多様な立場の人々と同じテーマで話し合えたことで、新たな視点・考え方を得ることができたという感想が多かった。

また、ICT活用の側面では、次のような感想があった。

- ・思ってもみなかったICTの活用方法を知ることができた。
- ・ICTという切り口があったためか、ICT肯定派の方が多いうように思う。情報通信技術が使えない場合どうするのかという視点があっても良かった。

その他の感想では、次のような声があった。

- ・ワークショップのみの研究会で全員が参加できたのが良かった。
- ・主体的な学びのデザインの難しさを感じた。
- ・学びについて多角的に考えられただけでなく、今まで自分自身が行ってきた実践についての根本的な問いと振り返りができた。

課題としては、次のような指摘があったため今後の研究会運営の参考にしたい。

- ・討論時間をもう少し長くして欲しい。
- ・初めのテーマがつかみにくかった。
- ・少しテーマが広くなりすぎた感がするが勉強になった。
- ・評価のあり方についての議論が必要だ。

研究会終了に何人かの参加者から同じような指摘があったが、「これだけの先生、生徒が集まりグループに分かれて話し合っていたのに、自然と同じような問題意識を持ち、夢や希望を持っていることに、勇気と希望をもらった」とのコメントが本研究会の意義を示していた。

本研究会開催にあたり、会場を提供していただいた大阪工業大学と、テーブルファシリテーターとして参加してくれた、法政大学経営学部長岡ゼミ所属の3名の学生に感謝したい。

文責 高瀬敏樹（北海道札幌旭丘高等学校）

【CIEC 外国語教育研究部会第7回学習会報告】

テーマ 「iBooks Author ワークショップ」
 日時 2015年1月11日(日)13:30~17:00
 会場 大学生協杉並会館 204-205 室
 (東京都杉並区和田3-30-22)
 講師 林 拓也 氏
 (オーサリング・エンジニア、テクニカル・ライター)
 参加者 11名

■概要

今回の学習会は、電子書籍のオーサリング・ソフトの中から、iBooks Author を取り上げ、参加者が各自準備したデータおよび講師が練習用に用意したサンプル・データを用いて電子書籍の製作を行うワークショップであった。始めに、iBooks Author の概要と操作方法の概略の説明を受けて、各自が持ち寄ったデータを用いての個別の電子書籍製作に取り組んだ。その後、講師の準備したサンプル作品とデータを使って、iBooks Author の操作性を生かした作品作りの研修を行った。受講者からは活発な質問が出されるとともに、全受講者のみならず、個々の受講者にも個別に丁寧な説明を受け、実りの多い学習会となった。



■iBooks Author の概要および特徴

始めに講師から、iBooks Author の概要および特徴の簡単な説明があった。

iBooks Author は、Apple 独自の形式で動作するソフトである。また、アップル社製の電子書籍閲覧アプリ「iBooks」のみで閲覧することができる。Windows 環境では使用できないという条件に加え、EPUB の閲覧に関してソフト面やハード面での制限が有るといふデメリットもある。しかし、それを補って、なお魅力的であるのは、次のような理由からである。(1) プログラミングやソース・コードの編集が不要で編集を簡単にできる。インターフェイスが充実している。(2) テンプレートを利用した「統一感のある見栄えのよい電子書籍」が作成可能である。「追加情報」、「写真の切り替え機能」、「地図が拡大する機能」などを備えていることも、見栄えをよくしている要素である。(3) 動画、音声を扱うことができるほか、クイズの提示などのいくつかのインタラクティブな機能を利用することが可能である。用語集で用語の設定をし、リンクをはりつけ、「吹き出し」を表示することができる。(4) 製作物は、無料で配布したり、iBooks で販売したりすることも可能である。

また、以下のような特徴があることも補足された。(1) 基本的に文字は、固定レイアウト形式でありリフローはしないので、複雑なレイアウトに向いていると言える。(2) 縦書き、ルビ、右開きは非サポートである。

■製作の実際1 (通しの説明と各自の作成)

iBooks Author での製作ポイントについて、テンプレートの選択からスタイルの利用、インスペクタの利用まで通しての説明が講師によって行われた。以下に各手順の概要を述べる。

【テンプレートの選択】

テンプレートの違いは方向(縦/横)がある。デザインは当然異なるが、機能的な違いはない。事前に各テンプレートのデザインをチェックしておくといよい。(チャプター・ページ、セクション・ページどちらのテンプレートも有るので見ておくといよい。章によってテンプレートを変えるのもよい。)

【基本構成】

タイトルページは、電子書籍の表紙に当たるものであり、iBooks のライブラリ画面のサムネイルとして表示される。販売する時のアピールの為に重要である。タイトルと著者名は大きく作成するのがこつである。目次は、コンテンツの作成と共に自動的に生成される。

【インターフェイス】

製作画面には、ツール・バー、追加用のボタン、フォーマット・バー、ウィジェット(インタラクティブ・オブジェクト)の追加等のボタンが並んでいる。フォントの設定(色、大きさ、太さ、行間のサイズ変更)、画像、音声等の張り付けを行う。サイド・バーには、サムネイルが表示されている。

【スタイルの利用】

テキスト用のスタイル(色、サイズ、行間等の設定)をスタイル・パネルに登録しておく、体裁を統一しながら作成が可能である。スタイルボタンを使い、表示、非表示の切り替えができる。スタイル・パネルは、基本的に表示しておき、適宜、文字情報を追加、修正、登録しながら製作していく。スタイルを上書きすると、そのスタイルを適用していた部分全ての体裁が変わる。改行を区切りとした一文には「段落スタイル」を、その中の一部のテキストには「文字スタイル」を適用する。

【チャプタとセクション】

チャプタとセクションという構成を意識して製作を行うと、わかりやすく、見栄えのよい書籍に仕上がる。チャプタのタイトルとリード文をあらかじめ用意しておくといよい。セクションも同様に、リード文を利用する。チャプタもセクションもテンプレート使用することで、目次が自動生成される。

【各種インスペクタの利用】

ツール・バーの「インスペクタ」ボタンで表示されている。「インスペクタ」とは、いろいろな機能を持ったパネルである。「テキスト・インスペクタ」、段落の前後のスペース作り、「回り込みインスペクタ」は、「回り込み」の方法の調整など、その他グラフィック・インスペクタで画像の色等を修正できる。「位置と回転インスペクタ」、「書類インスペクタ」等)インスペクタの上部ボタンでインスペクタの種類を変更できる。それぞれのインスペクタの役割を把握すると効率化がはかれる。

■製作の実際2 (講師の準備した教材データを用いての共通課題のワークショップと質問)

iBooks Author の操作説明と各自のデータを用いての製作が行われた後、講師の準備した教材データを用いて、「製作のポイント」を押さえた説明を受けながら、参加者全員で共通の課題で教材作りに取り組んだ。以下に、要点を示す。

【製作開始時の要点】

製作順序としては、表紙から作っていく。どのテンプレートを選んでも、見た目の違いを発生させないため、邦文

フォントに設定して始める。(欧文フォントが最初選ばれている。) 著者名とタイトルは、はじめに入れておく。イントロ・メディアに、オープニング用の動画ビデオを置いておくと、本を開いた時にビデオがながれる。

【書類インスペクタでの注意事項】

製作開始時には、書類インスペクタで始めに「横書き」に固定してしまう。横方向のテンプレートをを用いることで「固定レイアウト」で製作することができる。「横書き」に固定するとレイアウトが崩れないというメリットがある。横向きを縦向きにするとリフローが起こる。

【製作中の要点】

テンプレートをを用いて製作している際に、画像を差し替えるには、保存先のフォルダーからドラッグ・アンド・ドロップで置き換える。テンプレートでは、画像マスクがされているが、マスクのサイズも変更することができる。テキスト・ボックスでは、文字があふれると、新しく自動的にページが作られ、あふれた文字が流し込まれる。

自分で新しくテキスト・ボックスを追加することができる。「ページ区切り」を設定することで、ページの途中で次のページに進む。「段組み区切り」を設定すると、次の段に進む。用語集は脚注的に利用できる。

今回の学習会への参加者数は、新年最初の連休中の日曜日に開催されたということで少なめであったのが残念であった。半日という短い時間であったが、具体的でわかりやすい説明と、iBooks Author の機能を巧みに使用した「ひな形教材データ」によって、受講者は多くの成果を得ることができた。この学習会で得た知識と技術を用いて、電子書籍の製作のみならず、生徒や学生にとってわかりやすく、力づく教材開発への取り組みがなされることを期待している。

文責 真崎克彦 (明石市立中崎小学校)

【CIEC 春季研究会 2015 開催案内】

日時：2015年3月28日(土)

会場：大学生協杉並会館 地下会議室

■ 開催趣旨

CIEC 春季研究会は、学びとコンピュータやネットワークの利用に関する教育と研究の報告、討論を行うことで、より品質の高い成果へと結びつけるとともに、様々な分野の方との交流を行うことを主体として開催しております。本研究会で発表される報告は、事前に査読・審査され、「CIEC 研究会報告集 Vol.6」として発行いたします。

ここでは、会員の専門性に対する要望を取り入れながら、会員相互の研究交流を促進する場として、魅力的な研究会づくりを目指しております。あらゆる分野の人々が、学びとコンピュータやネットワーク利用の在り方とその可能性を考え、研究発表や実践事例の成果を聞くとともに議論に参加していただければと考えております。会員のみなさまの積極的な参加をお待ちしております。

論文発表プログラム

セッション1 座長 大岩幸太郎 (大分大学)

○実践論文 (10:00~10:25)

反転授業の運営と評価の方法

- アカデミックスキル修得のケース -

株式会社ハンテンシャ 加藤大 / 東京国際大学 河村一樹

○研究速報 (10:30~10:45)

大学における知的財産知識の定着を目指した Moodle を活用した反転授業の実践

山口大学 大学研究推進機構知的財産センター 阿濱志保

里・木村友久・佐田洋一郎

○研究速報 (10:50~11:05)

学生への実務教育にシニア技術者の活用と WBT システムの教材開発について

- アクティブインターンシップの提案 -

特定非営利活動法人日本アクティブキャリア開発 田中良一

・松本多恵・金田紀夫・島山一実・松本哲郎

愛媛大学 高橋寛 / 佐賀大学 林田行雄

○研究速報 (11:10~11:25)

学生のプログラミングの素養を調査する手法

三重大学大学院 小林史生・北英彦

セッション2 座長 立田ルミ (獨協大学)

○実践論文 (12:30~12:55)

Wiki が支える学び合いによる音声ガイドの作成

- 国語教育と鑑賞教育のクロスカリキュラム -

慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター 鈴木秀樹

○実践論文 (13:00~13:25)

一定間隔での操作要求を行うムービー配信サーバを用いた学習者の視聴動向と学習効果の考察

有明工業高等専門学校 松野良信 / 特定非営利活動法人

日本アクティブキャリア開発 田中良一

立命館アジア太平洋大学 NISHANTHA Giguruwa G. D. / 佐賀大学 林田行雄

○研究速報 (13:30~13:45)

プログラミング能力向上を目的としたプログラムテスト
の学習システム

三重大学大学院 高桑稔・北英彦・袁智韜

セッション3 座長 菅谷克行 (茨城大学)

○萌芽論文 (14:00~14:20)

画像処理を用いた双方向授業システム

- 多選択肢用カードの検討 -

金沢工業大学大学院 鎌田洋・増田和朗

○萌芽論文 (14:25~14:45)

ICTと電子書籍を活用した効果的な多読の実践方法

大阪教育大学大学院 藤田宏樹・大浦詩織・田中佑弥・堀
本孝正 / 大阪教育大学 吉田晴世

○資料 (14:50~15:10)

Windows 環境における EPUB コンテンツ作成の基礎

- 教員によるデジタル教材開発にむけて -

南九州短期大学 片岡久明

【CIEC 活動日誌】

[2015 年 1 月]

4 日 小中高部会世話人会

5 日 CIEC 第 105 回研究会
(大阪工業大学 うめきたナレッジセンター)

「越境する学び

- 不確実・不安定な状況に対応できる学び -」

・共催

教育システム情報学会関西支部

日本情報科教育学会 近畿・北陸支部

NPO 学習開発研究所

11 日 外国語教育研究部会世話人会

CIEC 外国語教育研究部会第 7 回学習会 (杉並)

「iBooks Author ワークショップ」

[2015 年 2 月]

22 日 2015PC カンファレンス第 1 回実行委員会

23 日 三役会議